

明治前期小生産者層の史的位置 (2)

野 原 建 一

- 1 序
- 2 長野県における東信地方の位置（以上第2号）
- 3 小生産者層の展開（以下本号）
- 4 結語

3

さて、小県郡は千曲川をはさんだ上田を中心に、その周辺に散在する村落からなる。この小県郡で養蚕業が営まれはじめたのは、18世紀の後半以降である。

『小県郡史』によるとつぎのようにのべてある。すなわち「養蚕は宝永3年（1706）多くは『蚕少々仕候』……『売買は仕らず』といえは、殆んど自家用を主とし、…桑圃は始め畦桑のみ、後密に畑に植うるものあり、宝暦・明和年間（1750～70年代）開墾地に植うるもの出で、天保年間（1830～40年代）本貫畑を桑圃となすもの漸く増加せり。従来上田藩は本貫畑に桑を植うるを禁じたりしも、利潤あるを以つて勢止むべからず…」⁽¹⁾とある。東信地方に位置する小県郡において、養蚕業が本格的にはじめられたのは近世後期のことである。

天保4年（1833年）の「蚕種商人制度書」によると「御領分近來蚕飼盛に相成候＝就而者、蚕種商人共茂右＝準追々相増候」⁽²⁾とある。さらに、安政5年（1858年）の町御手代から町問屋にわたされた書状によると「近來村方之者共諸商＝傾き、農業疎＝相心得候者茂可有之、素より本業相捨候而末業＝傾き候而者不相濟事＝候、乍去時勢

依而分限弁へ、農間渡世商向も又永続之筋＝も相成候」⁽³⁾というように、農村に養蚕を媒介とした商業化の波が激しくおしよせているようすがうかがわれる。それとならんで、商人の農村への進出ぶりがあわせて理解できるのである。くわえてその商人たちは、「御城下続者勿論其外迎も同様、在町和融いた」す他の地方の商人もくわわっている点が注目されよう。

以来明治前期にいたるまで、蚕種、繭、生糸の産額は多く、上田周辺においては、紬類をはじめとする織物生産も盛んにおこなわれていった。⁽⁴⁾そして、ついには「本邦中養蚕事業ノ隆盛ナル処ヲ問ヘバ、先ツ指ヲ我信濃ニ屈シ、信陽中其産出ノ巨額ナル所ヲ質サバ、何人ト雖トモ必スヤ我上田近郷ヲ以テ其首ニ推サン。然トモ製糸器械場ノ駢列スル処、精良ナル製糸ヲ造出スル点ハ或ハ他郡我ニ優ル処アランモ養蚕業ニ慣熟スルモノ、收穫高ノ巨額ナルモノニ至テハ、他郡ノ企及スベカラサル処ナリト云フ可シ。」⁽⁵⁾と豪語するまでにいたったのである。事実、明治十年代後半までは、小県郡の養蚕関係の産額は、県内では図抜けて多かった。⁽⁶⁾とりわけ蚕卵紙においては、第6表にみるとおり、明治20年にいたるまで県内で首位の座をゆずっていない。小県郡の産額がつねに50パーセントをこえて占めていることは表にみるとおりである。

では、こうした比重をしめす小県郡各町村における状態はいかなるものであったのか。この点を知る手がかりとして第7、8表がある。⁽⁷⁾まず第7表からみていこう。

表中の「繭」の欄から「生糸」の欄にかけて矢

第6表 郡別蚕卵紙生産高推移

(単位、枚)

	明治 16 年	明治 17 年	明治 18 年	明治 19 年	明治 20 年
南 佐 久		7,834	8,113	23,023	17,395
北 佐 久		1,513	5,317	13,175	18,622
小 県	150,245	87,745	149,935	239,729	462,717
諏 訪	6,272	2,560	5,959	13,045	19,024
上 伊 那	1,880	983	1,740	12,036	4,036
下 伊 那	3,247	1,779	1,775	6,557	13,279
西 筑 摩	2,211	1,787	1,815	4,842	5,313
東 筑 摩	41,975	2,112	47,990	69,134	68,826
南 安 曇		1,509	12,382	24,076	18,118
北 安 曇	100	330	2,172	3,594	12,283
更 級	12,734	7,915	10,400	17,354	16,851
埴 科	32,239	1,830	42,517	56,022	89,245
上 高 井	10,660	56,305	10,862	18,722	26,470
下 高 井	3,118	3,591	3,133	11,809	14,362
上 水 内	19,790	18,790	12,385	56,229	65,578
下 水 内	50	5	89	516	730
合 計	284,521	196,588	316,584	569,863	852,849

(注) 『長野県統計書』各年度刊より作成。

印がついているのは、農家で繭の生産と生糸の生産が一貫しておこなわれていることをしめしている。しかし、それは生産されるすべての繭が生糸にかえられていることを意味しない。なかには繭のまま搬出されるものもある。

さて、この表にあらわれている農家戸数と繭、生糸、絹・織物、蚕種それぞれの関係をみると、一戸当りの生産高がそれほど多くないことに気づく。農家の手間稼ぎ、副業ということもあるがその規模の小ささが目につくのである。したがって、そこでは「座操」という「器械」の普及がある一方で依然として手挽きという旧来の家内手工業的生産方法に依存している状態がその背景にある。もっとも、座操製糸器械が使用されていても、それが即マニファクチュア的生産様式をとるとはかぎらず、多くが小規模家内工業という存在形態である。

ところで、第7表によると絹・織物では上田町周辺の生産高が多く、農村での展開が不十分であ

る。逆に蚕種は、農村での産高が多いという商品による地域的特色をみることができる。

表中にある上野村について『明治11年小県村内概況調書』は、その「物産」の項においてつぎのようにのべている。⁽⁸⁾

「天保年間ハ物産甚タ乏シク慶応年度ニ至リ生糸繭蚕卵ノ騰貴スルニ過シ山野大卒桑野ニ変シテ巨額ノ繭ヲ得ルニ至リ明治4年ノ左右ハ蚕卵ヲ製スル凡七千七百十式枚ニ至ル惜ムヘキハ只目下ノ利ニ迷ヒ戸々濫製シ粧飾ヲ加フル者少ナカラス故ニ忽チ零落シ夫レカ為破産スル者少甚多シ即今ハ専ラ生糸ニ製シ蚕卵ヲ製造スル纔ニ千七百枚余而テ多クハ内国売却ス生糸ハ年々多ヲ加フルニ近シ皆座操器械ヲ以テ繰ス品位近邑ニ勝ルニ似タリ」

すなわち上野村では、幕末から明治初年にかけて、蚕卵を中心に商品生産がなされ、生糸の生産では座操器械が使用されている。しかし、第7表の上野村の項をみると、生糸生産高はさほど多くなく、また、農家戸数とくらべても1戸当りの生

第7表 明治11年小県郡の養蚕関係の生産高

町	村	名	農家戸数	人	口	繭	生	糸	絹・織物	蚕	種
						貫		貫	反		枚
傍上		陽	741	3,060	5,400	8					1,350
古		野	229	989	1,238	84					1,710
仁		里	270	1,163		137					2,088
別	古	田	152	605							
野		所	207	779		120					1,000
山		倉	103	378	532	40					
十		田	75	319	1,034	74		30			400
上		人	40	173	464	33		12			250
築	田	原	128	576		128		300			1,280
五		地	86	382		52		170			448
下	加	邨	182	736	1,720	213		280			1,150
神	之	郷	207	782	3,455	247					502
上		畑	126	527	1,323	73		230			1,500
上	本	入	127	556		25					
下	武	石	112	474		21					
下	本	入	62	286		12					
下	沖		67	259		8					
田	武	石	151	676		25					
鞍		沢	256	1,079	961						480
祢		掛	96	402	180						
祢	津	東	133	544	7	10					
姫	津	西	151	745	1,120	20					
	子	沢	55	254	300	4					
	和		615	2,532							
大		屋	60	306							7,000
岩		下	58	252		5		12			6,250
蒼	久	保	139	599	926	83					400
常	盤	城	575	2,332		90					8,812
鳥		屋	41	155	200	16					
小	沢	根	84	401		10					
余		里	74	296	112	9					
長		瀬	348	1,513	3,161	284					2,530
藤	原	田	74	354		58					
生		田	443	1,825		360		50			
御	嶽	堂	221	888		75					
上	丸	子	260	946		180					2,800
中	丸	子	160	604		85					1,600
下	丸	子	66	297	922						1,754
東		内	315	1,298		138					
新		屋	50	224	23	9					48
新		張	101	465	800						
滋		野	756	3,078	3,713	25					
	県		679	2,771	1,585	349					6,867
漆		戸	27	127	197	11					

町	村	名	農家戸数	人	口	繭	生	糸	絹・織物	蚕	種
						貫		貫	反		枚
林	之	郷	51	252				37			
芳		田	348	1,500		1,688		125			850
殿		城	344	1,488							
本		原	398	1,631		1,232					
	長		666	1,661		62,780		230			1,500
西		内	341	1,413				154			200
長	窪	古	405	1,706		1,708		135			
腰		越	162	703				113			
塩		川	359	1,457		4,750→		475			
中		野	101	410		1,270→		75			200
舞		田	85	355		1,400→		70			250
保		野	140	605		2,000→		102	20		300
八	木	沢	113	414		2,000→		100			500
小		島	117	119		2,250→		135	30		700
中	之	条	188	961		2,032		59			9,250
小		泉	307	1,317				140			3,200
福		田	60	235				44	30		950
村	松	郷	184	688		1,030					
国		分	139	1,160				372			6,215
常		入	419	1,430		1,214		60			2,000
秋		和	175	781				135	140		12,560
上	塩	尻	205	954							34,480
長	久	保	218	832		314		46			
和		新	509	2,219				120			
吉		田	81	340		1,020		74	75		650
下	室	賀	212	882		2,622					
小		牧	102	441				166	250		1,500
諏	訪	形	145	607		1,200		68			800
御		所	79	335				80	70		4,000
馬		越	147	633							
当		郷	151	666				107			
	岡		165	674				120			2,500
前		山	192	796		927		656	24		500
沓		掛	96	398				4			
住		吉	295	1,236		5,801		468			
殿		戸	68	273				61			
下	塩	尻	140	630							11,557
上	田	町	1,463	9,418					800		14,038
上	室	賀	195	795				127	40		
越		戸	90	395				54	60		1,050
手		塚	242	1,006				210	100		3,500
大		門	290	1,214		298		29			
下	之	条	145	630				150	800		3,000

(注) 長野県勧業課『明治11年小県村内概況調書』(明治12年)長野県立図書館蔵
尚, 1斗=1貫, 1斤=160匁として計算。貫以下は4捨5入。「絹・織物」には紬を含め, 1疋=2反として計算。

産高は他の町村と比して多いとはいえない。つまり、小規模生産という形態は変わっていないことになる。

いますこし『調書』をみてみよう。上田町から比較的近い塩田平に位置する五加邨についてはつぎのように記してある。

「該物産中米麦ハ3.4年平ニシテ豊凶ノ変ナク最モ本年（明治11年一筆者）ハ少ク実ノリ悪ク価格騰貴スル兆アリ故ニ愈人民耕作ニ精カス大豆收穫最モ少ク加フルニ近年旱損ノ害ニ罹リ益減シ特有中繭ハ收穫最モ多シ是ヲ生糸トナシ海外輸出ニ充ツ故ニ此業月ニ年ニ盛大ニ到ヌ蚕種ノ如キハ多ク国用トナシ海外輸出ニ不適故ニ其利少シ上田縞紬縞ハ工女愈精良ヲ争ヒ強美ヲ極ム価格等最モ上値アリ」

上記の五加邨では、繭や生糸生産だけでなく、上田町の織元と結んで織物の生産がおこなわれている。と同時に穀物類の生産と同じくらい養蚕業が農村経済において重視されていることがわかる。そして、このことから、小規模な「伝統的技法に基く農村の有力な副業生産が商業資本を媒介として編成され」⁹⁾くわえて、養蚕業の展開が「いずれも蚕種商人および仲買商人の手によって促進され」¹⁰⁾たという指摘に注目しなければならない。すなわち、重要な「海外輸出」商品であった生糸の生産構造が、近世以来の生産関係の上にきづかれていたという点である。このような従来の生産構造を維持しながら、需要に応じて生産高を上げていくなかからは、マニユファクチュア的、つまり、資本主義的生産様式形成の可能性はきわめて低いといわざるをえない。また、このことが低コストにもとづく低廉な商品の供給にむすびついていく。

ではつぎに第8表をみてみよう。第8表は長野県第1回共進会に申告された座繰製糸器械の様子をとりまとめたものである。雇用数から大体の経営規模が推測される。この表は明治13年の状態を現わしており、先の第7表につづいている。雇用数が無いものは、家族のみで営まれていることをしめす。

この第8表を一覧してわかるように、雇用数はきわめて少いものが多い。とてもマニユファクチュアと指摘できるものではない。ただ、そうした小

第8表 座繰製糸の経営規模

名 称	町村名	雇 用 数	
		男	女
柴崎 清 七	殿 城		1
上原 半 五 郎	〃		1
金子 儀 市	〃	1	1
井沢 礼 太	越 戸	4	100
古平 庄 三 郎	岡	2	5
拡栄 分 社	〃	0	100
保科 富 十 郎	〃		7
荒井 房 太 郎	上田町		7
春原 市 太 郎	〃		1
臼井 和 憲	〃	1	1
峯村 彦 エ 門	〃	1	1
内山 八 三 郎	〃	2	20
拡 栄 社	〃	40	500
青島 勘 之 惣	〃		1
古見 角 兵 衛	村松郷		6
沓掛 喜 重 郎	〃		6
宮入 金 治	〃		8
矢島 彦 三 郎	〃		7
本田 和 作	〃		5
沓掛 平 十 郎	〃		8
高寺 留 治 郎	本 原	1	1
横沢 幸 吉	〃	1	1
荒木 豊 吉	〃	1	1
丸山 八 左 衛 門	〃	1	1
宮下 宗 三 郎	〃	1	8
拡栄 分 社	傍 陽	10	120
三井 繁 作	〃	1	3
堀内 長 右 エ 門	〃	1	6
牧内 一	〃	1	2
清水 利 兵 衛	〃	1	5
山岸 永 右 エ 門	〃	1	3
塩入 重 太 郎	富士山		1
吉川 五 郎 兵 衛	〃		1
室賀 兵 左 衛 門	〃		1
西川 伝 重	〃		1
林 仲 吉	〃		1
室賀 喜 蔵	〃		1
峯村 段 蔵	〃		1
長津 弐 太 郎	〃		1
大熊 勝	〃		1
室賀 源 治	〃		1
工藤 桃 右 エ 門	〃		1
峯村 兼 吉	〃		1
小山 市 重	〃		1
依田 藤 吉	〃		1
工藤 重 右 エ 門	〃		1

名 称	町村名	雇 用 数	
		男	女
西沢 小平 太 (明産社)	御 所	5	12
上原 金 次 郎	舞 田	3	20
宮沢 逸 平	〃	1	
長張 常 五 郎	腰 越		
宮崎 藤 作	神 畑	1	1
竹内 佐 市	〃	1	1
中村 新 次 郎	東 内	1	1
池田 金 左 衛 門	長 瀬	1	5
秋山 津 右 門	滋 野	1	1
萩原 清 作	〃	1	1
寺島 和 作	〃	1	1
橋本 慶 一 郎	祢 津	1	3
中島 茂 右 衛 門	八木沢	1	1
関 熊 太 郎	塩 川	1	1
斉藤 彦 四 郎	十 人	1	2
宮島 徳 太 郎	小 牧	1	1
小林 助 市	〃	1	1
片岡 栄 作	〃	1	1
拡栄 分 社	住 吉	10	100
中村 元 三 郎	上田原	1	3
工藤 庄 五 郎	上丸子	1	2
小林 幸 右 門	〃	1	2
拡栄 分 社	国 分	10	100
金井 ・ 土屋	住 吉	1	5
山辺 勘 平	国 分	1	2
山越 七 右 門	〃	1	2
山部 善 兵 衛	〃		2
竹内 造 酒 平	〃		2
和田 市良 右 門	小 島	1	1
和田 典 一 郎	〃	1	1
中村 佐 一 郎	仁古田	1	1
横島 八郎 右 門	馬 越	1	2
清水 茂 兵 衛	上室賀		3
矢島 精 六	常盤城	13	25
太田 鴻 次 郎	〃		1
宮沢 為 作	下室賀		1
河西 幸 平	和 田		
上野 新 次	〃		8
龍野 仙 五 郎	古安曾		1
龍野 喜三 右 門	〃		1
宮原 智 作	〃		1
宮原 文 重	〃		1
塩入 万 平	〃		1
窪田 八 左 門	〃		1
今沢 源 重	〃		1
関 藤 右 門	〃		1

名 称	町村名	雇 用 数	
		男	女
上原 種 次	古安曾		1
龍野 兵 一 郎	〃		1
手塚 弥 三 郎	奈良本		1
志摩 政之 右 門	小 泉		1
増田 八 百 吉	〃		1
柳沢 治 作	〃		1
志摩 金 治	〃		1
柳沢 右 作	〃		1

(注) 『明治13年第1回共進会申告書』長野県立図書館蔵

規模経営のなかで、ひととき目立つのが拡栄社の存在である。この拡栄社は、規模および内容からみて、唯一マニユファクチュアの形態をもっていたものといえる。そこでまず本社の上田町拡栄社の経緯を『申告書』にもとづいてみてみることにする。

「本社ハ明治12年7月長岡万平、田中忠七及ヒ竹内勝造ノ協同ニ因リ創業シタルモノナリ……当地方ヨリ輸出スル坐操製糸ハ彼ノ得意先キナル米国市上ニ至リ直チニ販売スルヲ得ス必スヤ揚梓器械ノ手数ヲ経テ而シテ市上ニ顯ハルルモノナレハ其手数ニ要スル貨銀ノ為ニ価格ノ幾分ヲ減殺セラルルハ固ヨリ論ヲ待タス況ンヤ米国ハ雇工賃銀ノ昂貴ナル殆ント世界中ノ第1ニモ位シ我国ハ之レニ反シテ雇工ノ廉ナル殆ント印度地方ト価ヲ同フスルニ於テオヤ然ラハ其手数ニ属スル賃銀ヲ得ルノ策ヲ施サハ啻ニ利益ノ我ニ帰スルノミラス併セテ彼ノ使ヲ得ル智者ヲ待而シテ後チニ知ラサルナリ長岡万平等茲ニ見ル所アリ一ハ製糸濫造ノ弊ヲ矯メテ改良ニ赴カシムル方法ヲ設ケ声価ヲ挽回シーハ賃銀ノ利益ヲ我ニ得テ価格ヲシテ貴カラシム可キ兩全ノ策ヲ得ント……資本僅カニ壹万円ニシテ実施……而ミテ今13年本社ノ初荷トシテ横浜港茂木惣兵エノ紹介ニヨリ米商ニ売込ミタル……」(傍点筆者)

上記にみるように、東信地方において器械製糸の先駆的役割をもつ拡栄社の設立は、生糸の均一化、賃金の改善を目ざすものであった。この拡栄社は、県勧業課の保護もあって、傍陽村(明治12年9月設立)、岡村(明治13年7月設立)、国分村

(岡村と同年月)に近村の複数の農家による出資金により、つぎつぎと設立、稼業をはじめていたのである。また、ひとり拡栄社にとどまらず、明治14年には和田村にて「創めて20人取製糸器械」⁽¹²⁾が設置されるなどマニユ的生産様式の展開がみられる。さらに旺業社(西内村)、明産社(御所村)の設立がある。

しかし、このような器械製糸の展開も、農家の副業的な小規模座繰製糸を克服することができなかった。明治20年代に入る頃においてもなお、小規模生産、すなわち、近世以来の間屋制という生産関係の上にきづかれた座繰がさかんにおこなわれたのである。⁽¹³⁾

注

- (1) 『小県郡史』正篇767～8頁。
- (2) 『長野県史』近世史料編第1巻東信地方 187頁。
- (3) 同書 211頁。
- (4) 高島諒多『信濃蚕業沿革史料』清水利雄編『小県上田歴史年表』
- (5) 牧内元太郎「上田町ノ商業ニ就テ」『上田郷友会月報』52号 明治24年 1頁。
- (6) 拙稿「明治前期小生産者層の史的位罫」『本州大学紀要』第2号 20～21頁参照。
- (7) 第7表のもとになっている『明治11年小県村内概況調書』については、すでに大井隆男氏が「明治初期における長野県東信地帯の製糸業(1)」『信濃』第15巻第2号において発表されている。したがって、重複する部分があるが、逆に補充する部分もあるので、あえて取り上げたしだいである。また、大井氏の発表された数値と若干の相違があったときは、筆者が依拠した前述の『調書』の数値を優先した。
- (8) 長野県立図書館蔵
- (9) 大井隆男 前掲論文の(3)『信濃』第15巻第4号 30頁。
- (10) 庄司吉之助『近世養蚕業発達史』225頁。
- (11) 勸業課『明治13年10月第1回共進会申告書』長野県立図書館蔵
- (12) 『長野県町村誌』(東信篇) 296頁。
- (13) 『信濃蚕糸業史』下巻「古来提糸の本場として著名なりし上田地方にありては、久しく器械製糸発達せず。明治21年の製糸工場調によれば僅45釜の吉池製糸場及び12釜の親睦社(和田村)あるのみにして依然として座繰製糸全盛を極めたり。」(同書 928頁。)

以上みたように東信地方小県郡においては、諏訪地方にみられる器械製糸というマニユファクチュア経営が十全な形では展開していない。もちろん、拡栄社などにみる端初的形態でのマニユ経営はあっても、それはあくまで端初的狀態で消滅してしまっている。そして、小規模な副業的座繰、手挽生産が主軸をなして明治10年代までの県内の生糸生産を中心的に担ってきたのである。

第8表は、長野県の養蚕家数の推移をしめしている。小県郡はなるほどその戸数においては、比較的多きを数えているし、生産高も多い。しかし、その経営規模、内容は家内手工業的段階であり、商人資本のもとに問屋制前貸に近い状態で農家が緊縛されていることに注目する必要がある。なお、参考までに明治11年から16年にかけての蚕糸生産高と価額をしめすものとして第9表をかかげておこう。価格が年によって変動しやすい商品であるだけに、農家の副業以上に発展することができにくい要素もあったかもしれない。しかし、やはり商人資本の支配力がそれ程強くなくても、零細耕作地をもつ農民にとっては、また、畑作地の多い農民にとっては、養蚕業にたとえ「印度地方ト価ヲ同フスル」手間稼ぎであったとしても、それに従事せざるをえない状況にあったといえることができる。

他方、拡栄社創設につとめた長岡万平は、「明治3年頃蚕種取引枚数に於て、上田界限第1で、5万枚の多数に及び、蚕種商として又生糸商として其名甚高かった。明治2年2月東京開市と成りしより、東京府に於ては、鉄砲洲に貿易商社を設立した」⁽¹⁴⁾商人である。このようにマニユ的经营をおこなったとされる場合でも商人資本の存在が、在来産業発展のテコの役割を果しているのである。同時にそれは、生産構造の中軸的存在でもある。

以上、東信地方小県郡において、自生的農村工業の展開は、マニユ的規模に発展しない問屋制に組みこまれた形で持続したため、ついにみることはできなかった。この点は、織物業についても同様で、土産的特産品の地位をこえることはなかつ

第8表 郡別養蚕家数の推移

	明 治 17 年		明 治 18 年		明 治 19 年		明 治 20 年	
	戸	%	戸	%	戸	%	戸	%
南 佐 久	8,940	9.6	7,763	4.5	11,208	5.5	11,218	5.1
北 佐 久	1,652	1.7	3,844	2.2	12,024	5.9	13,506	6.3
小 県	15,578	16.7	24,109	14.1	26,194	12.9	26,194	11.9
諏 訪	7,866	8.4	9,335	5.5	12,027	5.9	15,356	7.0
上 伊 那	12,005	12.9	21,067	12.3	12,880	6.3	17,880	8.1
下 伊 那	10,769	11.6	15,854	9.2	19,505	9.6	18,534	8.4
西 筑 摩	3,458	3.7	5,429	3.2	6,933	3.4	7,320	3.3
東 筑 摩	2,403	2.6	17,469	10.2	28,709	14.1	27,222	12.4
南 安 曇	1,080	1.3	5,642	3.3	7,685	3.8	10,521	4.8
北 安 曇	2,628	2.8	5,037	2.9	5,736	2.8	7,616	3.5
更 級	7,906	8.5	15,801	9.2	15,801	7.8	16,284	7.4
埴 科	6,176	6.6	12,513	7.3	12,353	6.0	12,979	5.9
上 高 井	4,834	5.2	12,422	7.3	12,422	6.1	11,758	5.4
下 高 井	3,791	4.1	8,690	5.1	9,987	4.9	9,987	4.5
上 水 内	3,326	3.6	5,531	3.2	9,052	4.4	11,032	5.0
下 水 内	610	0.7	833	0.5	1,263	0.6	2,230	1.0
合 計	93,022	100.0	171,339	100.0	203,779	100.0	219,637	100.0

(注) 『長野県統計書』各年度刊より作成。

第9表 長野県蚕糸産高と価額

	生 産 高	総 価 額	貫 当 り 価 格
	貫	円	円
明 治 11 年	38,465	1,224,437	32
12	56,298	2,248,778	40
13	69,144	3,084,445	45
14	72,522	4,116,979	57
15	108,913	4,857,525	45
16	81,332	2,587,954	32

(注) 『明治前期財政経済史料集成』第19巻p. 283より作成。貫、円以下4捨5入。

た。⁽²⁾ その理由として後に発展する諏訪地方と比較するなら、第1に容易かつ、安価に資本を調達することができなかったこと、第2に、それが拡栄社のようにたとえ商人資本であれ、調達されたとしても投資の連続性を保障する金融環境が存在しなかったことなどが指摘される。⁽³⁾

いづれにせよ、幕末から明治前期にかけて輸出商品の基軸をしめた生糸が、以上にみるような生産構造に依存していたこと、そして、それが約半世紀間という短い期間ではあっても幕藩体制から天皇制軍事国家へという権力移行の経済基盤をささえていたという点を看過することはできない。この後、明治10年代後半から、政府は在来産業の奨励、育成をはかっていく。ただし、その在来産業の商品が輸出商品である場合に限られる。

かくて、政治的変革下の経済的変容を養蚕業にかぎってみるならば、それは実質的に小商品生産形態を軸に展開していったのである。つまり、天皇制中央集権国家の形成の基軸は、小生産者層で

あったとみるべきであろう。

(注)

(1) 『上田市史』上巻 1090頁。

(2) 神立春樹『明治期農村織物業の展開』石井寛治『日本蚕糸業史分析』同「産業資本(2)絹業」大石嘉一郎編『日本産業革命の研究』上巻収載。

(3) なお、商人資本と明治政府の初期殖産政策の関連については、山本弘文「初期殖産政策とその修正」安藤良雄編『日本経済政策史論』上巻収載を参照。また、明治財政における殖産政策の位置づけについては、高橋誠『明治財政史研究』を参照。

ただし、日本の特異な金融制度成立の背景については、産業構造とからめて今後の課題となるだろう。

<後記>

本稿が成るにあたって、猪坂直一、岡部忠英各氏、また、長野県政資料室の方々に御指導を賜った。記して謝す次第である。